

# 日本ハンセン病社会事業史研究 (第5報)

## －1920年代における希望社のハンセン病救済運動の検討－

平 田 勝 政

### A Study on History of Social Work for Hansen's Disease Patients in Japan (5)

Katsumasa HIRATA

#### 1. 研究の目的・方法・倫理的配慮

なぜ日本では、ハンセン病患者が国際動向から乖離して90年の長きにわたり隔離を強制され続け、取り返しのつかない過ち(人権侵害・人生被害)を生じさせたのか、その乖離の過程と原因についての歴史的解明はいまだ十分とはいえない。本研究は、日本のハンセン病政策とその社会事業のあり方に決定的な相違をもたらす隔離監禁主義と治療解放(開放)主義に注目して、この2つの考え方の成立・展開と相克の過程を、1920年代に重点を置きながら解明しようとする一連の研究の続報である<sup>1)</sup>。

本研究は、従来の希望社の機関誌「希望」(主に第5～14巻)に依拠した研究(藤野:1993, 平田:2010)<sup>2)</sup>では十分に解明できなかった希望社によるハンセン病救済(=「救癩」)運動の成立・展開過程の全体像とその特徴を、「希望社時報」「希望の日本」等の新資料<sup>3)</sup>を含む〈資料1〉に整理した希望社ハンセン病関係資料の再分析を通して解明し、今後のさらなる研究の手がかりを得ようとするものである。

なお、すでに「癩」などの表記に見られるように、人権尊重の見地からすると不適切語が使用されているが、以下でも歴史的用語として「癩」等を使用することをお断りしておく。

#### 2. 希望社の「救癩」運動の時期区分について

拙稿(2010)では、希望社のハンセン病救済運動を、①第1期(全生病院への慰問活動を中心とする時期:1924～1925)、②第2期(慰問活動にとどまらず、草津における三上千代の鈴蘭村建設を支援する運動を高揚させた1926年から後退していく1929年の時期)、③第3期(1930年春頃からの希望社東京寮友会による運動再開から1931年6月の「癩病根絶期成同盟大会」までの時期)に区分して各期を概括し、さらに第3期に注目して重点的な解明をおこなったが、資料的制約から希望社の「救癩」運動の成立・展開過程の全体像を把握できていなかった。

上記の新資料を含む〈資料1〉の文献を整理・検討した結果、希望社の「救癩」運動は、より詳細には下記の6期に区分して把握することができるといえる。

- ①第1期(1918～1924):「救癩」の主体形成期
- ②第2期(1925～1926.8):「癩理想村」(=鈴蘭村)建設のための「癩病撲滅運動」展開期
- ③第3期(1926.9～1929):「癩療養所」への入所推進期(運動としての後退期)

- ④第 4 期 (1930 ~ 1931.3) : 希望社東京寮友会主導の「癩病絶滅運動」展開期
- ⑤第 5 期 (1931.4 ~ 9) : 希望社の総力を結集した「癩病根絶期成同盟大会」の準備・開催期
- ⑥第 6 期 (1931.10 ~ 1934) : 希望社事件後の没落期における「同胞の家」建設の推進と「癩病根絶期成同盟会」としての存続・解消の時期→詳細は、拙稿 (2010 : 11 ~ 13 頁) 参照。  
以下、第 1 期から希望社事件による没落前の第 5 期までの各期を概観していく。

### 3. 希望社の「救癩」運動の成立・展開過程

#### (1) 第 1 期 (1918 ~ 1924) : 「救癩」の主体形成期

第 1 期は、希望社の創業者 (社長) である後藤静香 (1884 ~ 1969) が、「救癩」の主体として形成されるまでの時期である。

後藤静香とハンセン病問題との出会いは、『後藤静香選集』第 10 巻所収の「再び救ライ運動」(1962 年執筆) によれば、大分県生まれの後藤が、「小学校のころ、修学旅行で熊本まで行き、本妙寺の門前にならぶこじきの群れを見た」ことに始まる。詳記しないが、視力を失い、肢体不自由となり、異臭を放つその「まるで地獄の絵でも見せられた」ようなハンセン病患者 (= 「こじき」) の光景が、強烈な印象として後藤の脳裏に焼きつき、それが、後藤における「救癩」への原点になっている。それ以外にも様々な体験があると考えられるが、本稿が検討の対象とする〈資料 1〉の希望社関係資料では、1919 年の「希望」第 2 巻第 6 号 (1919.6) で「ああ丹下の老女史」(〈資料 1〉の目録 No. 1、以下、No. のみ記載) と題して、「丹下松子」(広島県出身、89 歳) の「救癩」活動に言及したのが最初である。同号の「巻頭の写真」に後藤と並んだ 2 人の写真 (= 「此世における最初の、さうして恐らく最終の影」) を掲載した上で、本文中の「癩病人も貧乏人も」という見出しの中で、その「救癩」の一端を次のように紹介した。

「明治二十八年、同村内に住む貧乏な癩病人の為に家屋を作り、建具、敷物は勿論、寝具、食器に至るまで一切を取り揃えて住ましめる。病が重くなって四肢の自由を失い、汚臭甚だしく誰一人顧みるものも無いときに、女史は其の不幸を慰め、穢れた蒲団や着物を洗濯したり、お粥を炊いて与えたり、万事万端に心を配り、丁寧な介抱をして天寿を全うせしめた。」(13 頁)

この丹下女史の一村における「救癩」活動等に見られる「身を社会公共の為に献ずる覚悟」への深い共感、やがて日本の「救癩」に尽力する光田健輔 (全生病院院長) との出会いへと向かわせていく。その契機は、全生病院入院患者「FM子」からの希望社 (後藤) 宛の手紙であった。「希望」第 5 巻第 10 号 (1922.10) に、その手紙は、「癩患者の哀願」(No. 2) と題して紹介されている。手紙には、「私は、不幸にも癩病にかかり、之が治療に、百万家産を尽しましたが寸効なく、加ふるに、家族には病難死難がつづき、一家は全滅いたしました。聖代の御恩澤にお救いを受け、此の病院に参りまして、もう八年を過ごしました。」(63 頁) と身の上が綴られ、さらに「去る日看護婦の方々から『希望』を見せられ、「読み行くうちに、何だか、之までの悶え、悲しみが、次々と消えてゆく様な感じがして、只有りがた涙がとめどなく流れました。さうして、之までにない、何ともいえない悦びが起りました。此の様な御本が此の世にあらうとは夢にも存じませんでした。どうかして余命のある限り拝読致したうございます。」(64 頁) と記され、最後に、誌代が

払えない身の上故、「先生、どうか、残部がございましたならば毎号一部づつ御恵みを下さいませんか」との「合掌嘆願」で結ばれていた。この「哀願」に対し、後藤は、「ああ何といふ御気の毒なことでせう。私は、すぐ御返事を出し、此方へは勿論のこと、全生病院へあて毎号五十部づつ寄贈することと致しました。」(64頁)と応じた。こうして「希望」誌の寄贈を媒介に、後藤静香(希望社)と全生病院とが結びつき、やがて1924年から後藤(希望社)の全生病院への訪問(慰問)が始まっていく。その事実関係を、「希望」1924年12月号(7巻12号)に掲載された後藤の「日記抜粋」(1924.1～12)から一覧表に整理すると次のようになる。

1924年6月	府下東村山村全生病院訪問。此の事が、あの8月号(=「希望」5巻8号のこと：筆者注)に現れた大きい問題を巻き起こした。 ※林芳信『回顧五十年』では、「大正十三年六月二十九日 後藤静香氏が氏の主宰される希望社社員数名とともに慰問される」(39頁)と記されている。
1924. 7.27	全生病院訪問。今日は富士登りの話をする。あの境域に限られた人々が、自分で登った様な気持ちになって悦ばれる。六万の癩病患者は、我が同胞が責任をもって慰めねばならぬ。
1924. 8.25	御殿場なる神山復生病院に患者を訪問する。
1924.10.27	訓練講習生一同をつれて、全生病院を訪問する。各地の誌友より寄贈せられたる慰問品持参。大悦び。ここを訪ふたびに身の幸を思ふ。あの人たちに比ぶればどんな病気でも有りがたい。

光田健輔は、1935年の「愛生」2月号(5巻2号)掲載の「癩病院訪問者の今昔」(2頁)で、「希望社の後藤静香氏が震災をまぬかれた私の一粒種の『癩患者の告白』を見て大変心を動かして癩病院の訪問に来るようになった」と記しているが、小学校の修学旅行での体験や1919年における丹下女史の「救癩」活動への深い共感等の前提条件があればこそ、「心を動かし」たのであり、その点を見落としてはならない。全生病院訪問(1924.6.29)で光田から「焼け残った只一冊」の『癩患者の告白』(内務省衛生局発行、全438頁、1923年)を借り受け、同書と光田(その人物・思想)からの学びを通して、希望社の中心人物である後藤静香自身が「我が同胞」への深い同情と慰問の必要性を自覚し、光田が考える問題の解決方法にも共鳴して、「救癩」の主体として形成されていった。その主体性の実践化・運動化の現れが、1924年の「希望」8月号(5巻8号)掲載の「恵まれぬ人々」(No3)であり、「一度此の病にかかったが最後、今の医術では全治さすことの出来ない不治の病である」という認識に立って、15万の誌友に「一日も早く六万人の全部を隔離せねばならぬ」(光田の考えを代弁)と訴え、慰問活動等の支援を求めた。なお同8月号(45頁)には、「癩患の盲者から」と題する手紙も掲載されており、その盲者を支える女性に後藤が5年前(=1919年)から「希望」誌を送っていたことへのお礼が記されている。

## (2) 第2期(1925～1926.8)：「鈴蘭村」建設のための「癩病撲滅運動」展開期

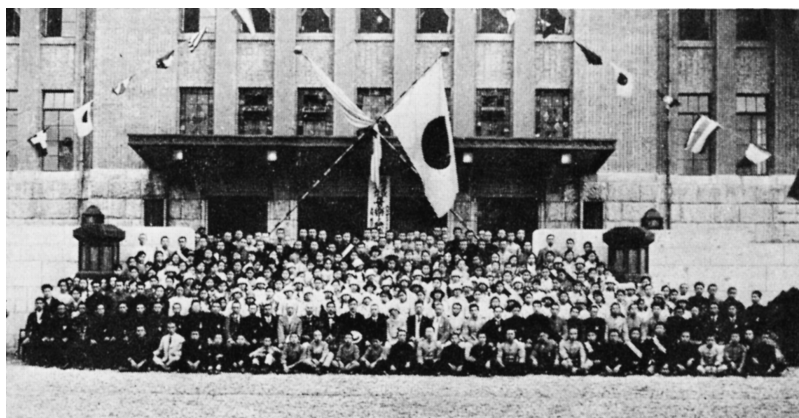
周知のようにコンウォール・リーが草津で経営する聖バルナバ医院を辞して女医・服部ケサと看護婦・三上千代が鈴蘭医院を草津(上町と湯之澤の境)に開設(1924.11.1)したが、服部ケサの急逝(1924.11.22)により挫折(方向転換)を余儀なくされた三上千代は、失意の中から立ち直って、光田の支援を受けながら草津(瀧尻原)に鈴蘭園を設立して鈴蘭村(=自由な理想村)建設の実現に1925年春より取りかかった。一方、1925年1月から

「癩病患者の慰問」を「希望社社会教化事業要目」の「救護及び慰問」の一つに位置づけ、希望社の事業として毎月 1 回全生病院への慰問活動が続けられていくが、その中で、鈴蘭村建設の話を知った後藤は、積極的にその支援に乗り出していった。1926 年 4 月末(4.30)には光田と同伴で草津を実地調査し、その構想を練り、「希望」6月号(7巻6号)で「鈴蘭村－癩病撲滅運動－」(No.5)と題して運動の必要を提起し、誌友に協力を呼びかけた。この論文の内容については検討済みのため立ち入らないが、注目すべき点としては、約 2 年前の論文「恵まれぬ人々」では、「不治の病」としていたものが、「早く入院すれば全治する。又全治しない場合でも軽くなる。」と記していることである。拙稿(2012:38頁)で明らかにしているように、この時期の光田の考えを反映する興味深い記述である。

上記後藤の提唱に応えた中央の運動として、1926 年 6 月 27 日に「希望社誌友全国学生聯盟・帝都学生勤労倶楽部・癩病撲滅運動総本部」(3 団体)が主催で「音楽と映画の会」(於・日本青年会館、参加者約 2500 名)が開催された。その大会プログラムは、「希望社時報」第 7 号 (No.6) に、次のように掲載されている。

<b>音楽と映画の會</b>	
<p><b>時</b> 六月二十七日午後一時</p> <p><b>所</b> 日本青年館</p> <p><b>主催</b> 希望社誌友全国学生聯盟 帝都学生勤労倶楽部 癩病撲滅運動總本部</p> <p><b>プログラム</b></p> <p>講演 全生病院長 光田健輔 希望社長 後藤静香</p> <p>ピアノ 東京音楽學校 細川碧</p> <p>童謡舞踊 印牧秀雄</p> <p>印牧パロー研究會員</p> <p>器樂舞踊 同 前</p> <p>獨唱 原田君代</p> <p>伴奏 比良野綾子</p> <p><b>映 画</b></p> <p>恵の園 (全生病院の生活) 我家の窓より (アルニス藝術作品)</p> <p>淋しき燈臺守 (ペーギー主演)</p> <p><b>入場切符</b></p> <p>二圓 一圓五十錢、一圓 純益全部鈴蘭村建設費とす</p> <p>此の計畫が發表せられと俱 樂部員、勿論、修省舎學生</p>	<p>及東京誌友の目覚ましい活 動となり、切符は飛ぶ様に 賣れる。</p> <p>宮城御内儀よりも幾十枚と 度々の御申込を頂く。</p> <p>都下の専門學校、大學には ボスターがはり出される。</p> <p>今では、當日あの會館にど うして容れるか、問題とな つて居る。兎も角日本青年 館開館以來の盛況と豫想せ られて居る。</p> <p>根より根へと歩んだ希望社 は、間接とはいえ公開的態 度を以て、帝都の表面に現 れたのは震災後の活動を除 いては之が最初である。</p> <p>幾年間養つた根柢ある仕事 には花が咲く。</p> <p>不幸な同胞のために此の運 動の成功を祈る。</p>

当日の大会の様様については、下の写真を参照されたい。



(出所)『後藤静香選集』第 6 巻の口絵写真より (善本社提供)

この中央の取り組みに呼応して全国（植民地を含む）から寄附金が寄せられ、「希望社時報」第9～12号（1926.9～12）に「鈴蘭村建設資金領収報告」（No.10～13）が掲載（樺太から三重県まで、以後掲載中止）され、その運動の広がりや成果が誌友に示された。特に「福岡の壺千五百円」と「青森の壺千八拾壺円」が「南北の大関」として特記され、純益7千円が鈴蘭村の患者住宅5戸分として寄付されていた。福岡の寄附は、「希望社時報」第8号（1926.8.1）によれば、「福岡報恩会」によるもので、その家（患者住宅）は「報恩館」と命名されたという。後の十坪住宅運動に継承される患者住宅の建設・寄附運動の原型がここに形成されていたと言える。

また同運動を報道する地方新聞（「香川新報」1926.6.23付、見出し「鈴蘭村の資金に二位局のお心尽し」など）もあり、宮内省の高官・女官が支援に動いていることが一般国民にも知らされた。さらに「百万円で、天刑病村三百戸、内務省が国立として上州の瀧尻ノ原に」（「香川新報」1926.7.8付の1面）との見出し記事が出るなど内務省の動きと連動して希望社の撲滅運動が展開されており、内務省（衛生局）のハンセン病政策の実現を先導する役割を果たそうとしていることが読み取れる。内務省の具体的構想は、次のように報道されている。

「内務省衛生局では来年度の新予算中に天刑病患者救済費に百万円を投じて単なる府県事業ではなく国家事業としてやるのが五日きまった。（中略）湯之澤から三十町程山奥に入った人跡まれな瀧尻ヶ原に坪一円で二十万坪を買取り三年計画で国立天刑病村を建設する。病舎はまず三百戸で一戸の建坪は十五坪一戸ごとに百坪の畑をあて彼等の耕作地にする。そして草津温泉から瀧尻ヶ原まで三十町木管をして湯を引くしまた草津の住民に関係のない道路を新たに設けて町からの購買取引は一切此処からして病人は他の町には絶対に入りにせず彼等に依って米も作れば野菜も作ると云う自給自足の自治村にすべく来年度から実現させて行く筈」

しかし鈴蘭村の建設を内務省が支援して三百戸の「自給自足の自治村」を建設する計画は、結局100万円の予算（案）が認められず頓挫する（8月）。

### （3）第3期（1926.9～1929）：「癩療養所」への入所推進期（運動としての後退期＝運動の本格展開の準備期）

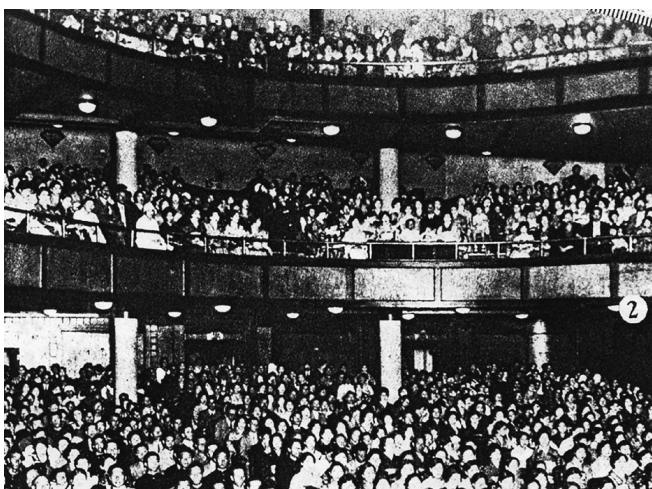
鈴蘭村建設の支援運動は、「永く続けねばならぬ運動である」（No.7）と記していたにもかかわらず、突然（8月末に）希望社の運動に変化が生じた。具体的には、「希望社時報」第9号（1926.9.1）がその8面に「癩病撲滅運動の方向転換」（No.9）と題する記事を掲載し、鈴蘭村建設のための「寄附打切り」を打ち出した。さらに「患者を病院へ」との小見出しで「今後、此の運動は、患者を病院に入れることに全力を注ぐ。あなたの村に患者があったら、すぐに御知らせ下さい。それを本人に示し、入院の幸福を語り、家の為め村の為め本人のために勧めて下さい。無料」と記して運動の方向転換を誌友に呼びかけた。こうして第2期の「癩病撲滅運動」は僅か数ヶ月で終焉し、以後「癩療養所」への入所の勧めが希望社の運動とされたが、希望社（中央）は全生病院への慰問とそこでの相互修養会に終始していった。ただし、三上千代が1928年2月に提起した鈴蘭村への温泉導引への寄附の呼びかけに応じて、希望社への下賜金（3,000円）より1,000円の寄附を発表し（No.15）、1928年3～12月の「希望社時報」（第27～38号）には「鈴蘭村温泉導引寄附者」

(No.16～18, 20～28)の名簿が掲載されている。しかし、その寄附金合計は600円余で温泉導引に必要な目標額1万円に遠く及ばなかった。この第3期は希望社運動が組織拡大に重点を置いたため「癩病撲滅運動」の方は後退したかに見えるが、それは「癩病撲滅運動」を実効性をもって展開していくための組織的な力量形成期であったと見ることもできる。事実、同志（誌友）が100万を突破した1929年8月号の「希望」掲載の「希望社の使命」(No.30)では、「癩病に対する運動」について言及している。さらに希望社大日本聯盟結成(1929.11)を記念して出版された『希望社大観』(No.31)では、「癩患者の慰問」の重要性を提起し、希望社最高幹部講習会での各府県聯盟主事の全生病院慰問(1929.6.4)の写真を掲載(No.29の転載)することで、希望社の全国組織(各道府県聯盟)に「救癩」活動を根づかせようとしている。

#### (4) 第4期(1930～1931.3)：希望社東京寮友会主導の「癩病絶滅運動」展開期

1930年の春頃より、希望社東京寮友会が中心になって「癩病絶滅運動」が展開される。すでに拙稿(2010)で記述しているので、ここでは写真資料等で補充していきたい。

まず東京で開催された「癩病絶滅資金募集・音楽と舞蹈の夕べ」(1930.9.21開催、於・日本青年会館)の案内が「希望の日本」第56号(No.33)と第57号(No.34)に、第59号(No.35)にその模様が掲載された(下の写真参照)。



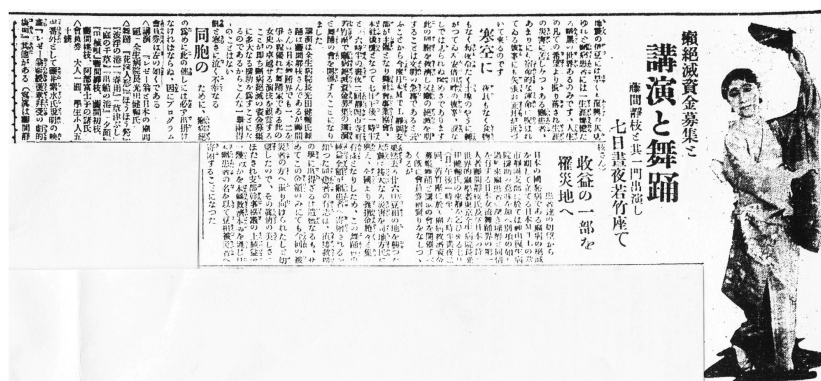
続いて、東京寮友会の取り組みが、「希望の日本」第60号(No.36)に右のように予告され、群馬、静岡へと広がっていった。

群馬における「音楽と舞蹈の会」(1930.11.30開催、於・前橋市群馬会館)の様子は、「希望の日本」第61号(No.39)に写真で紹介されている(次頁上段の写真参照)。

東京寮友会後援	
癩病絶滅資金	
募集の會	
前橋市	十一月三十日(日)晝夜
	『音楽と舞踊の會』
沼津市	十二月六日(土)午後
	『舞踊と講演の會』
清水市	十二月六日(土)夜
	『舞踊と講演の夕』
静岡市	十二月七日(日)晝夜
	『藤間静枝氏舞踊會』
濱松市	十二月八日(月)夜
	『舞踊と講演の夕』

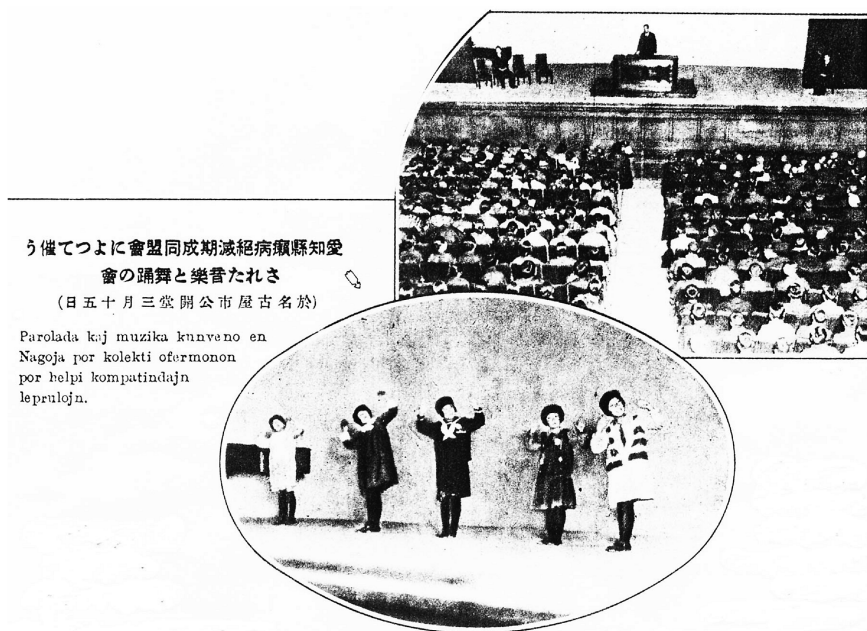


1930年12月開催の静岡県内4箇所（沼津・清水・静岡・浜松の4市）のうち、目下のところ静岡市での開催が確認できる。「静岡新報」第12509号（1930.12.4付・3面）は、「癩病絶滅資金募集と講演と舞踊、藤間静枝と其一門出演し、七日昼夜若竹座で」との見出し（写真入り）で、次のように報じている。



記事によれば、主催は東京寮友会（希望社）ではなく日本MTL静岡支部であり、神山復生病院への援助が目的で、講演は、光田健輔の「レゼー翁と日本の癩問題」であった。純益の一部は、「患者達の切望から」地震被害（1930.11.26）にあった豆相の被災者に「日本癩患者の名を以て寄附する」ことになっていた。

東京→群馬→静岡での取り組みは、拙稿(2010)で解明しているように、愛知（名古屋）へと波及し、愛知県では希望社愛知県聯盟が中心になって「癩病絶滅期成同盟会」が発足、その創立大会を開催（1931.3.15、光田が講演）するに至る（No.41）。その大会の様子を伝える写真（No.43より）を次頁上段に示す。



#### (5) 第5期(1931.4～9)：希望社の総力を結集した「癩病根絶期成同盟大会」の準備・開催期

愛知県の取り組みとその成功を踏まえ、1931年5月に希望社内に社会事業部（責任者・和泉徳一）を設置してパンフレット「恵まれざる人々と子孫のために」（No.55.61）を発行し、「希望の日本」第65号（1931年5月号）では、後藤静香が「皇太后陛下御誕辰の佳節を期し全国一斉に癩病根絶運動を徹底す」（No.46）と題して、1931年6月25日に希望社（誌友100万）の総力（中央・地方支部）を動員して全国一斉に「癩病根絶期成同盟大会」を開催していくことを提起した。さらに、6月の「希望」第14巻第6号で「敢て憐みを求めず」（No.56）を掲載し運動への参加・協力を訴えた。

表1は、「希望の日本」第68号と同69号に掲載された大会開催関係記事（主にNo.65）をまとめたものである。表2は、希望社の社会事業部担当の和泉徳一が「大会漫語」（No.69）と題して各地（1道2府13県と台湾・朝鮮・満洲）の取り組みの特徴を紹介したものを一覧にしたものである。光田健輔（No.76）によれば、同大会は、「日本全国都市六十三ヶ所」（植民地を除く）で開催され、「数十万人の賛同を得た」とされている。拙稿（2010）では、2府5県（東京・京都、青森・秋田・福島・栃木・熊本）での開催しか把握しえなかったが、表1・表2からは、和歌山・香川・鹿児島・沖縄の4県を除く1道3府39県と台湾・朝鮮・満洲での大会開催や募金運動の展開を確認することができる。大会は、1931年6月6日の岡山市に始まり、8月上旬までの約2ヶ月間にわたって開催され、植民地を含む全国規模の広範な運動であったことが示されている。とくに朝鮮は全土で一斉に運動が展開されており注目される。



表1 1931年6月25日を中心とする「癩病根絶期成同盟大会」の開催一覧

道府県名	大会開催地（開催日時、開催場所など）／大会開催以外の取り組み	
北海道・東北	北海道 ①札幌市（6.30、公会堂）、②小樽市（6.25、女子校）、③下湧別（6.25、湧別座）／函館市（献金袋にて募金集め）、名寄町（ピラにて募金集め）	
	青森県 弘前市（6.25、公会堂）	
	岩手県 ①盛岡市（6.25、公会堂）、②花巻町（7.23頃開催予定）	
	宮城県 *開催等の内容不明	
	秋田県 ①秋田市（6.25、記念会館）、②大曲町（6.25、仙北劇場）、③横手町（6.24、2回、松竹館）	
	山形県 *開催等の内容不明	
	福島県 ①会津若松市（6.25、栄楽座）、②福島市（6.25、2回、新開座）	
関東	茨城県 潮来町（6.25、青年会館）	
	栃木県 足利市（相互修養会にて募金集め）	
	群馬県 前橋市（6.25、群馬会館）	
	埼玉県 *開催等の内容不明	
	千葉県 *開催等の内容不明	
	東京府 東京市（6.25、日比谷公会堂）	
	神奈川県 横浜市（7.10より4日間、第一、二、三、四隣保館）	
中部	新潟県 ①新発田町（6.25、小学校）、②三條町（6.25、図書館）	
	富山県 富山市（6.25、仏教会堂）	
	石川県 *開催等の内容不明	
	福井県 *開催等の内容不明	
	山梨県 *開催等の内容不明	
	長野県 岡谷町（6.25、倶楽部）、下諏訪（6.27、図書館）、長野市（9月頃開催予定）	
	岐阜県 岐阜市（7.5、公会堂）	
	静岡県 ①静岡市（6.25、尋常高等小学校）、②沼津市（6.13、国技館）、③清水市（6.15、栄壽座）、④吉原町（7.5、東座）、⑤原田村（6.25、小学校） ※②③は7月？	
	愛知県 ①名古屋（6.24、公会堂）、②一宮市（7.19頃開催）、③安城町（7.5、女専校）、④布袋町（6.27、布袋座）、⑤古知野町（6.25、役場）	
	三重県 下村町（6.25、小学校）	
近畿	滋賀県 大津市（7.26、公会堂）	
	京都府 ①京都市（6.25、公会堂）、②綴喜郡井手町（8.2）	
	大阪府 ①大阪市（6.27、2回、朝日会館）、②伊丹町（6.28、伊丹劇場）	
	兵庫県 神戸市（6.25、昼夜2回、青年会館）／飾磨町（修養会にて募金集め）	
	奈良県 *開催等の内容不明	
	和歌山県 × *取り組みなし	
	鳥取県 米子市（6.25、啓成校）	
中国・四国	鳥根県 津和野（6.25、小学校）	
	岡山県 ①岡山市（6.6、教育会館）、②津山市（6.21、小学校）	
	広島県 ①広島市（6.25、公会堂）、②西城町（7.5、小学校）	
	山口県 ①山口市（7.5、公会堂）、②下関市（7.4、会議所）	
	徳島県 /新聞紙上で募金	
	香川県 × *取り組みなし	
	愛媛県 ①松山市（6.25、公会堂）、②吉田町（7.4、小学校）	
	高知県 高知市（6.25、堀詰座）	
	九州・沖縄	福岡県 ①大牟田（6.27、公会堂）、②門司市（6.28、市役所）、③草野町（6.25、専念寺）、④福岡市（9月頃開催予定）
		佐賀県 鹿島町（6.25、小学校）
長崎県 /戸別訪問等による募金集め		
熊本県 熊本市（6.25、大和座）		
大分県 別府市（6.25、公会堂）／臼杵町（女学校にて募金集め）		
宮崎県 ①都城市（6.25、公会堂）、②延岡町（7.18、延岡劇場）		
鹿児島県 × *取り組みなし		
沖縄県 × *取り組みなし		
旧植民地	台湾 基隆（7.27～28、基隆座）	
	朝鮮 ①京城（6.25、公会堂）、②釜山（6.25、公会堂）、③平壤（6.25、公会堂）、④仁川（6.25、公会堂）、⑤海州（6.25、海州劇場）、⑥天安（6.25、天安座）、⑦群山（6.25、群山劇場）／公州（ピラにて募金集め）	
	満州 /大連（ピラにて募金集め）、長春（修養会にて募金集め）、熊岳城（戸別訪問による募金集め）	

注）県名が特定できない松山町は本表から除いている。

表 2 「癩病根絶期成同盟」の地方大会概況

No.	道府県名	概 要
1	北海道	函館の鈴蘭……北海道は、鈴蘭の時節になったナアと思った時、既にあの香り高き花は函館の同志から全国の癩療養所へ送られてあった。 札幌と長官……池田長官が札幌の大会で一言の挨拶をされた。菅氏のお手柄。同地のポスター又なかなかの出来栄え。
2	青森県	水木氏を迎え……弘前市では、同市出身の音楽家水木氏を迎え百パーセントの効果を示した。
3	岩手県	ポスターで来い……全国一のポスターは盛岡市の分であった。岩手にして斯くの如しと、県主任大威張りであった。おごらすこと。
4	秋田県	健闘の秋田……見て居てはらはらす程夢中になったように見えたのは秋田県であった。宣伝効果は慥かにあったでしょう。
5	福島県	集めたり集めたり……会津若松あらゆる団体を協賛せしむ、数え切れず。 電報宣言……大会の宣言文を満場一致で安達内相へ打電し、福島市民の誠意を披瀝す、流石は福島。
6	群馬県	リー女史へ感謝……前橋では多年草津にて癩患者のため働いて居られたリー女史へ感謝状を呈す。
7	東京府	安達内相四十分……日比谷公会堂での内相の講演、予定を超過すること十分、正味四十分の長弁舌、其の上、熱意溢るものなりき。
8	神奈川県	県の主催？……横浜で四日間県主催の会があった。プロ（グラム）は遙拝に始まる、講師は和泉某、但しその器に非ずと林院長に行って頂く。
9	岐阜県	即座に三百円……岐阜市での修養会の席上即座に癩運動へ三百円を出された無名氏あり。
10	静岡県	MTL……静岡には牧師飯野十造氏がMTL理事として癩運動に献身して居られる、今回は静岡、沼津、清水三市で大会を開かれた。
11	愛知県	県下総動員……日本に於ける癩病県の一つ愛知県は、全県席卷策を採り片ッ端より大会を開催す。見事！
12	京都府	日活酒井米子……大会の挨拶「不幸なる人々のため妾達も幾分のお手伝いが出来ますことを嬉しく存じます」
13	山口県	光田先生突来……思いもかけぬ光田先生の応援に悦んだは山口市の大会主催者と会衆。
14	高知県	ウォッシュで寄附……高知は大会の外、洗濯講習で宣伝し百円寄附。
15	熊本県	お琴を並べた熊本城……出演延人員二百有余名の三曲合奏、東西に比類なからんと鼻高々。
16	宮崎県	演芸行進曲……遊戯、琵琶、劍舞、舞踊、ヴァイオリン、マンドリン、三味線、尺八、琴、講談、端歌、独唱、等々。都城のプロ（グラム）
17	台湾	名画の夕……基隆
18	朝鮮	秘曲公開……李王家の雅曲を公開されたる京城の大会、尊し。 見事な純益……平壤の大会四百参拾円貳拾五銭の純益が献金されました。
19	満州	百戸で百四十口……熊岳城は満州の一中間駅、戸数約百戸、応募口数百四十口、総額四拾円四拾九銭也。

#### 4. おわりに

本研究では、従来の研究が分析の対象としてこなかった新資料（「希望社時報」→後誌「希望の日本」等）の発掘・整理・検討の結果、①希望社の「救癩」運動の成立・展開過程は、拙稿（2010）の3期区分では不十分で、その全体像は6期区分で把握できること、②その各時期の特徴を概括できたこと、特に第3期の希望社最高幹部講習会（1929年）の重要性が示唆されたこと、③1931年6月25日を中心に希望社主導で開催された「癩病根絶期成同盟大会」の全体像を把握していく上での貴重な手がかり（表1・表2参照）が明確になったこと、などの成果をあげることができた。

今後の課題は、本庄陸男による「教化団体『希望社』運動の徹底的解剖」<sup>4)</sup>等の当時における希望社批判も踏まえながら、希望社が1931年6月25日を期して開催した「癩病根絶期成同盟大会」が契機となって、「癩予防デー」、十坪住宅運動、「無癩県運動」がどういふ関係構造をもって派生していったのかを明らかにしていくことである。そのためには、表1を手がかりに東京（中央）の取り組みに呼応した「癩病根絶期成同盟大会」の地方開催の実態を実証的に解明し、その運動の特徴と影響を検討していくことが不可欠である。

## 〈注〉

1) 筆者のこれまでの研究成果は、下記のとおりである。

①拙稿(2009a)：1920年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究「研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集—」第2巻第2号、1～11、2009年3月

②拙稿(2009b)：日本ハンセン病社会事業史研究(第1報)—1922年のディーン博士の来日とその治療解放主義の影響の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第73号、31～42頁、2009年3月

※第1報の訂正→32頁20行目の皮膚科教室を削除した上で、伊藤斯郎(誤)を、伊藤隼三(正)と訂正する。

③拙稿(2009c)：「日本MTL(日本救癩協会)と機関誌『日本MTL(楓の蔭)』」(『近現代日本ハンセン病問題資料集成(補巻16～19)解説・総目次・索引』所収)不二出版、5-17頁、2009年5月

④拙稿(2010)：日本ハンセン病社会事業史研究(第2報)—民間の隔離主義運動の成立・展開過程の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第74号、1～15頁、2010年3月

⑤拙稿(2011)：日本ハンセン病社会事業史研究(第3報)—治療解放主義の系譜(楽生病院)の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第75号、25-34頁、2011年3月

⑥拙稿(2012)：日本ハンセン病社会事業史研究(第4報)—治療解放主義の形成と軽快退所問題の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第76号、31-41頁、2012年3月

※第4報の訂正→39頁28行目の「改善してという段階」(誤)を、「改善していくという段階」(正)と訂正する。

2) 藤野豊(1993)『日本ファシズムと医療—ハンセン病をめぐる実証的研究—』岩波書店、41-45頁。平田(2010)は、注1) - ④参照

3) 本研究が、検討の対象とする新資料とは、主に下記の①②である。ともに榛名高原邑の後藤静香記念館(群馬県高崎市上室田町4040-3)に所蔵されている。

①「希望社時報」第1～39号(1926.1～1929.3)→後続誌「希望の日本」第40～74号(1929.4～1932.2)。但し、第72号(1931.11)は欠号。

②「希望」第1巻第1号(1918.6)～4巻12号1921.12)、5巻1～2号(1922.1～2)

4) 「新興教育」第2巻第2号、同3号、1931年2月、3月

(謝辞) 本稿をまとめるにあたり、後藤静香記念館での「希望社時報」「希望の日本」等の希望社関係資料の調査・収集にご協力ご支援をいただいた館長の中澤宏則氏、新生会事務局の中嶋芳正氏、同記念館の隣に在住で世話人の福田肇氏に心より感謝いたします。

(付記) 本研究は、社会事業史学会第40回大会(2012年5月12日 於・日本女子大学)において発表した「1920年代のハンセン病問題と社会事業(第7報)—希望社の隔離主義的「救癩」運動の検討—」(『社会事業史学会第40回記念大会報告要旨集』80～81頁と当日配布資料全11頁)の主要部分(十坪住宅運動関係部分は除く)に、日本社会福祉学会第60回秋季大会(2012年10月20日 於・関西学院大学)において発表した「1920年代のハンセン病問題と社会事業(第8報)—希望社地方支部のハンセン病救済運動の検討—」の一部を合成し、修正・加筆したものであり、2012年度科学研究費補助金(課題番号23530724)による研究成果の一部である。

## 〔資料1〕希望社ハンセン病関係資料目録

2012.10.31 案

No.	著者名	書名・論文名・記事名	誌名・巻号／出版社名	頁	発行年月	備考
1	後藤 静香	ああ丹下の老女史 *「癩病人も貧乏人も」の見出しあり	「希望」第2巻第6号	5-15	1919(T. 8)-6	全国の誌友へ
2	後藤 静香	癩患者の哀願 *全生病院入院患者からの手紙の紹介	「希望」第5巻第10号	63-64	1922(T.11)-10	全国の誌友へ
3	後藤 静香	恵まれぬ人々 *『後藤静香選集』第10巻所収	「希望」第7巻第8号	2-41	1924(T.13)-8	全国の誌友へ
4		感謝献金／全国民総努力癩病撲滅運動	「希望」第9巻第6号	表紙の裏面	1926(T.15)-6	全国の誌友へ
5	後藤 静香	鈴蘭村－癩病撲滅運動の提唱－ *『後藤静香選集』第10巻所収	「希望」第9巻第6号	52-61	1926(T.15)-6	全国の誌友へ
6		音楽と映画の会 *1926.6.27の案内	「希望社時報」第7号	10	1926(T.15).7.1	
7		献金袋の要求	「希望社時報」第7号	10	1926(T.15).7.1	
8		国立瀨村の建設	「希望」第9巻第8号	1	1926(T.15)-8	全国の誌友へ
9		癩病撲滅運動の方向転換	「希望社時報」第9号	8	1926(T.15).9.1	
10		鈴蘭村建設資金領収報告(1) *樺太、北海道、宮城県、福島県、岩手県、青森県、山形県、秋田県	「希望社時報」第9号	8	1926(T.15).9.1	
11		鈴蘭村建設資金領収報告(2) *茨城県、栃木県、千葉県、群馬県、埼玉県、神奈川県、東京府	「希望社時報」第10号	8	1926(T.15).10.1	
12		鈴蘭村建設資金領収報告(3) *東京府(つづき)	「希望社時報」第11号	10	1926(T.15).11.1	
13		鈴蘭村建設資金領収報告(4) *東京府(つづき)、静岡県、愛知県、山梨県、長野県、岐阜県、新潟県、福井県、富山県、石川県、滋賀県、三重県	「希望社時報」第12号	10	1926(T.15).12.1	
14		全国の癩療養所へ	「希望社時報」第14号	14	1927(S.2).2.1	
※	谷間の小百合	癩病撲滅運動に就いて－鈴蘭村の建設－	「社会改良」第6号	80-91	1927(S.2)-4	石川
15		ご下賜の光栄に浴して *鈴蘭村に言及	「希望」第11巻第2号		1928(S.3)-2	
16		鈴蘭村温泉引用費寄附者芳名① (自昭和三年二月一日至同年二月二十日)	「希望社時報」第27号	11	1928(S.3).3.1	
17		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名② (自昭和三年二月二十一日至同年三月十日)	「希望社時報」第28号	12	1928(S.3).4.1	
18		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名③ (自昭和三年三月十一日至同年四月十日)	「希望社時報」第29号	12	1928(S.3).5.1	
19	後藤 静香	回顧十年 *「癩病撲滅運動」に言及(35頁)	「希望」第11巻第6号	10-42	1928(S.3)-6	
20		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名④ (自昭和三年四月十一日至同年五月十日)	「希望社時報」第30号	12	1928(S.3).6.1	
21		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名⑤ (自昭和三年五月十一日至同年六月十日)	「希望社時報」第31号	12	1928(S.3).7.1	
22		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名⑥ (自昭和三年六月十一日至同年七月十日)	「希望社時報」第32号	12	1928(S.3).8.1	

No.	著者名	書名・論文名・記事名	誌名・巻号／出版社名	頁	発行年月	備考
23		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名⑦ (自七月十一日至同年八月十日)	「希望社時報」第33号	8	1928(S. 3). 9. 1	
24		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名⑧ (自八月十一日至同年九月十日)	「希望社時報」第34号	2	1928(S. 3).10. 1	
25		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名⑨ (自九月十一日至同年十月十日)	「希望社時報」第35号	10	1928(S. 3).11. 1	
26		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名⑩ (自十月十一日至同年十一月十日)	「希望社時報」第36号	8	1928(S. 3).12. 1	
27		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名⑪ (自十一月十一日至同年十二月十日)	「希望社時報」第37号	9	1929(S. 4). 1. 1	
28		鈴蘭村温泉導引費寄附者芳名⑫ (自昭和三年十二月十一日至同四年一月十日)	「希望社時報」第38号	7	1929(S. 4). 2. 1	
29		全生病院慰問(写真と記事) *希望社最高幹部講習会(1929.6.1~6.7) の期間中に実施(1929.6.4)	「希望社時報」第43号	2と6	1929(S. 4). 7. 1	全 国
30		癩病に対する運動(「希望社の使命 三」より) *「後藤静香選集」第10巻所収	「希望」第12巻第8号 (同志百万突破記念)	10-12	1929(S. 4)-8	全国の 誌友へ
31	佐藤勇香編輯	「希望社大観-希望社全日本聯盟結成・大 希望館落成記念出版-」 *17頁に「癩患者の慰問」あり(「希望社各 府県聯盟主事の全生病院慰問」と「患者と 相互修養会を開く慰問団」の写真付)。	希望社全日本聯盟発行	全44頁	1930(S. 5)-2	東 京 (中央)
32	東京寮友会 (希望社内)	「この世の中で最も不幸な人々は!」 *光田健輔論文「世界の癩絶滅運動より見 たる日本国民の責務」を取録 *「近現代日本ハンセン病問題資料集成(戦 前編)第2巻」所収	東京寮友会発行	全29頁	1930(S. 5)-8	東 京
※	光田 健輔	世界の癩絶滅運動より見たる日本国民の責務	「日本MTL」第11輯	3-4	1930(S. 5)-8	
33		全国的に永続的に癩病絶滅運動起る、義憤 に立つ寮友会	「希望の日本」第56号	11	1930(S. 5). 8. 1	東 京 (中央)
34		(案内) 癩病絶滅資金募集「音楽と舞踊の 夕」*9.21開催	「希望の日本」第57号	16	1930(S. 5). 9. 1	東 京 (中央)
※	希望社東京寮 友会主催	癩病絶滅運動資金募集の音楽と舞踊の会 *1930.9.21開催・日本青年館(光田:癩運 動に於ける日本国民の責務)	「日本MTL」第11輯	5	1930(S. 5)-10	東 京
※	和泉 徳一	寮友会主催 声楽と舞踊の夕べ	「山桜」第12巻第10号	14	1930(S. 5)-11	東 京
35		(写真) 東京寮友会主催の癩病絶滅資金募集 の「音楽と舞踊の会」の盛況 *9.21開催	「希望の日本」第59号	2	1930(S. 5).11. 1	東 京 (中央)
36		東京寮友会後援、癩病絶滅資金募集の会	「希望の日本」第60号	3	1930(S. 5).12. 1	東 京 (中央)
※		群馬県癩運動 *1930.11.30、希望社群馬聯盟主催で、「癩 に関する講演と舞踏と音楽の会」を開催(来 会者3000名)。光田の「癩運動に於ける日 本国民の責務」と題する講演等あり。	「日本MTL」第12輯 のど書 き	2-5	1930(S. 5)-12	群 馬
37	後藤 静香	在欧中最高の悦	「大道」(「希望」第14 巻第1号所収)	2-3	1931(S. 6). 1. 1	全国の 社友へ
38		東京寮友会、癩病絶滅運動の主流となる、 本年は全国的に計画せん	「希望の日本」第61号	5	1931(S. 6). 1. 1	東 京 (中央)

No.	著者名	書名・論文名・記事名	誌名・巻号／出版社名	頁	発行年月	備考
39		(写真) 前橋市群馬会館に於ける癩病絶滅資金募集の「音楽と舞踊の会」の盛況	「希望の日本」第61号	27	1931(S. 6). 1. 1	群馬
※	後藤 静香	癩病根絶運動と希望社 *『近現代日本ハンセン病問題資料集成(補巻7)』所収	「社会事業の友」第27号	25-27	1931(S. 6)-2	
40		九州療養所に慰問の餅を贈る	「希望の日本」第63号	5	1931(S. 6). 3. 1	熊本
41		(案内) 癩病絶滅運動助成 音楽と舞踊の会(3月15日、名古屋市公会堂)	「希望の日本」第63号	13	1931(S. 6). 3. 1	愛知
42	癩病絶滅運動期成同盟会	『日本国民に訴ふ』 *『近現代日本ハンセン病問題資料集成(戦前編)第2巻』所収→発行年が1926年とされているが、筆者は1931年初頭と推定		全7頁	1931(S. 6)-? (推定)	
※	癩病絶滅期成同盟会主催	癩絶滅運動・舞踏と音楽の会(名古屋市公会堂、1931.3.15開催)*協賛・名古屋新聞社	「日本MTL」第13輯	4-5	1931(S. 6)-3	愛知
※	全生財団	癩絶滅運動報告	「山桜」第13巻第3号	14	1931(S. 6)-3	東京
43		(写真) 愛知県癩病絶滅期成同盟会によって催された音楽と舞踊の会(於・名古屋市公会堂、3月15日)	「希望の日本」第64号	2	1931(S. 6). 4. 1	愛知
44		名古屋市に於ける癩病絶滅運動、県聯盟が中心になり官民合同で着々歩を進む	「希望の日本」第64号	7	1931(S. 6). 4. 1	愛知
45		(写真) 北部保養院に於ける相互修養会	「希望の日本」第64号	7	1931(S. 6). 4. 1	青森
46	後藤 静香	皇太后陛下御誕辰の佳節を期し全国一斉に癩病根絶運動を徹底す	「希望の日本」第65号	3	1931(S. 6). 5. 1	東京(中央)
47		癩の根絶易々たり、決起せよ九千万同胞	「希望の日本」第65号	4	1931(S. 6). 5. 1	東京(中央)
48		記念せよ国民、六月二十五日の佳節、癩根絶の日なり	「希望の日本」第65号	4	1931(S. 6). 5. 1	東京(中央)
49	光田 健輔	癩は遺伝に非ず伝染なり	「希望の日本」第65号	4	1931(S. 6). 5. 1	東京(中央)
50		内務省衛生局立案、癩の二十年根絶策	「希望の日本」第65号	5	1931(S. 6). 5. 1	東京(中央)
51		澁澤子爵を会長に癩予防協会の設立	「希望の日本」第65号	5	1931(S. 6). 5. 1	東京(中央)
52		皇太后陛下の御思召を體し、我等は斯く進む *1931.6.25の具体案	「希望の日本」第65号	5	1931(S. 6). 5. 1	東京(中央)
53	和泉徳哉(希望社・社会事業部主任)	『全国一斉』を標語とし、社会事業部は進む	「希望の日本」第65号	5	1931(S. 6). 5. 1	東京(中央)
54		患者自ら救癩に尽す	「希望の日本」第65号	5	1931(S. 6). 5. 1	東京(中央)
※	和泉徳一(希望社・社会部)	癩絶滅運動に就て	「山桜」第13巻第5号	14	1931(S. 6)-5	東京
55	癩病根絶運動期成同盟会	『恵まれざる人々と子孫のために』(パンフレット) *No61より		全?頁	1931(S. 6)-5 (推定)	東京(中央) 未見
56	後藤 静香	敢て憐みを求めず *誌上講演	「希望」第14巻第6号	2-23	1931(S. 6). 6. 1	全国の社友へ

No.	著者名	書名・論文名・記事名	誌名・巻号／出版社名	頁	発行年月	備考
57		(案内) 燐たり帝都に於ける癩病根絶期成同盟大会	「希望の日本」第66号	6	1931(S. 6). 6. 1	東京(中央)
58		我等の陣容成る、三室戸子爵を会長に、期成同盟会は強く起つ、同志よ更に猛進されよ(写真入)	「希望の日本」第66号	6	1931(S. 6). 6. 1	東京(中央)
59		群馬県では堀田知事を載き根絶運動を進む	「希望の日本」第66号	6	1931(S. 6). 6. 1	群馬
60		(案内) 癩病根絶寄附募集『観劇会』	「希望の日本」第66号	7	1931(S. 6). 6. 1	東京(中央)
61		『恵まれざる人々と子孫のために』 *パンフレット発行の紹介	「希望の日本」第66号	7	1931(S. 6). 6. 1	東京(中央)
※		癩問題に総動員せよ(1931. 6. 25、癩病根絶期成同盟会を設立) *日比谷公会堂	「日本MTL」第14輯	2	1931(S. 6)-6	東京
※	布谷 よし江	癩根絶期成同盟会に出席して *弘前市	「甲田の裾」第9号	24-25	1931(S. 6)-8	青森
62		全国に徹底せる癩根絶運動	「希望の日本」第67号	13	1931(S. 6). 7. 1	東京(中央)
63	和泉生	癩運動偶感	「希望の日本」第67号	13	1931(S. 6). 7. 1	東京(中央)
64		(写真) 癩根絶運動の提唱が巻起した各地反響のそれぞれ偶感	「希望の日本」第68号	2	1931(S. 6). 8. 1	東京(中央)
65		全国一斉運動の壮観と実力に驚く、癩病の根絶既に明瞭	「希望の日本」第68号	8	1931(S. 6). 8. 1	全国
66		群を抜ける神戸市の献金成績、壱千貳拾八円也	「希望の日本」第68号	8	1931(S. 6). 8. 1	兵庫(神戸)
67		米子市の苦闘、必ずしも成功のみならず	「希望の日本」第68号	8	1931(S. 6). 8. 1	鳥取(米子)
68		レブラ農繁期を論ぜず	「希望の日本」第68号	8	1931(S. 6). 8. 1	広島
69	和泉生	大会漫語	「希望の日本」第68号	8-9	1931(S. 6). 8. 1	全国
70	光田 健輔	九州人は癩の根絶に向かって奮起せよ	「希望の日本」第68号	9	1931(S. 6). 8. 1	東京(中央)
71	和泉 徳哉	大会通観	「希望の日本」第68号	9	1931(S. 6). 8. 1	東京(中央)
72	和泉 徳哉	愛生園行、附・癩運動の道	「希望の日本」第69号	7	1931(S. 6). 9. 1	東京(中央)
73		大津市の癩根絶大会 * 7月26日開催	「希望の日本」第69号	7	1931(S. 6). 9. 1	滋賀
74		井手町の映画の会 * 8月2日開催	「希望の日本」第69号	7	1931(S. 6). 9. 1	京都
※	後藤 静香	病める同胞に賜る言葉(9.4付)	「甲田の裾」第12号	20-23	1931(S. 6)-11	
75	和泉 徳一	昭和七年度に於ける社会事業部の責務 *「癩病運動」あり	「希望の日本」第72号	11	1932(S. 7). 1. 1	東京(中央)
76	光田 健輔	「癩同胞の家」建設の願い *「長島は語る 岡山県ハンセン病関係資料集・前編」所収の資料226番(383頁)と同一である。昭和8年の資料として扱われているが、本資料が初出である。 1931. 11. 28の癩病絶滅運動期成同盟会主催の歌舞伎興行の際の講演「癩同胞の家建設の急務」の要旨と判断される。	「希望の日本」第72号	11	1932(S. 7). 1. 1	東京(中央)

No.	著者名	書名・論文名・記事名	誌名・巻号／出版社名	頁	発行年月	備考
77	癩病根絶運動 期成同盟会	『祖国日本の名誉と恵まれざる人々のために』 *『近現代日本ハンセン病問題資料集成(戦前編) 第3巻』所収		全28頁	1932(S. 7)-6	